Tokyo Union Theological Seminary

基礎神学としてのキリスト教弁証学

熊　澤　義　宣

I．基礎神学という概念をめぐって：

基礎神学（theologia fundamentalis）とは，元来は，ローマ・カトリック神学の概念である。

ローマ・カトリック神学においては，基礎神学は，神学本来の営みを遂行するのに先立って，あらかじめその障壁となりうる諸問題を取り扱う予備的な部分という意味で基礎神学と呼ばれる。基本的には，教皇の権威をめぐる問題と，一つなる教会に，現実には複数の諸教会が存在するのはなぜか，というエキュメニズムの問題が，基礎神学の主要な問題といえる。教皇権の問題は，カトリック神学におけるドグマの学としての教義学の基礎として，どうしても論じておかなくてはならない問題であり，一つなる教会の問題は，教会の学としてのカトリック神学にとって，やはり，不可避的に神学の主体に関する問題であると考えられている。

このような基礎神学は，教義学，倫理学と並立する神学の一分野であるというよりは，むしろ，教義学，倫理学を含む，神学プロパーに対して，その営みに入る前に，基礎的に論じる諸問題という意味で，基礎神学として位置づけられているといえよう。それは他方においては，神学への導入として考えられているために，カトリック神学以外の世界に対しては，弁証学として位置づけられることは言うまでもないが，その場合，弁証学が，教義学，倫理学と並立しているのではなくて，それら神学的な営為に対する基礎的な営為として位置づ

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

けられるところにその特色がある。

近来，このカトリック神学における基礎神学の概念が，弁証学[1]に代わって，プロテスタント神学においても用いられるようになってきている。たとえば，G．エーベリングは，自分の専門分野を基礎神学と称し，すでに4冊を重ねているその論文集『言と信仰』（Wort und Glaube）の第2巻（1969）には，「基礎神学と神論への論文」という副題がつけられ，第3巻（1975）の副題でも「基礎神学，救済論，教会論への論文」と基礎神学と銘打った論文が収められている。そのもっとも最近の論文集であるその第4巻（1995）では，「生の対局における神学」という主題のもとに，第1部では，シュライアマッハーとフォイエルバッハをめぐって《宗教と宗教喪失》の問題，第2部では，《聖霊と時代精神》，第3部では《宗教改革と現代》，第4部では《神学と科学》，第5部では《生と教理》，すなわち，生は教えることができるのか，という問題をめぐりながら，生と死の問題を論じている。全体的に基礎神学的な論述であるが，とくに，第4部に収録されている「福音主義（プロテスタント）的な基礎神学論」（1970）は基礎神学に関するエーベリングの見解を知る上で重要である。エーベリングは，この中で，基礎神学の概念を，弁証学の概念と共に，とりわけシュライアマッハー的な意味での神学通論（Enzyklopädie）の概念を共に論じている。神学通論は，基礎神学に他ならない。基礎神学とは，その意味で，神学通論，弁証学などが志向していたものを，今日，改めて取り上げようとしている，といえよう。

最近において，プロテスタント神学の立場で，基礎神学との取り組みをしている神学者としては，ルター派のヴィルフリート・ヨスト（Wilfried Joest）がいる。彼には，C．アンダーソン，W．イェッター，O．カイザー，E．ローゼなどとの共編の『神学』（Theologische Wissenschaft）の11巻『基礎神学，神学の基礎問題と方法問題』（Fundamentaltheologie, Theologische Grundlagen- und Methodenproblem, 1974）があり，その論文集『神は進んで人間のところに来たりたもう』（Gott will zum Menschen kommen, 1977）には，「現在の諸問題の地平における神学の課題」という副題がつけられている。そ

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

の第1部，展望には「バルトとブルトマンの間」をはじめ，解釈学に関する論文などが収められ，第2部，具体的な諸問題には宇宙論や自然科学の問題なども論じられている。ヨストの65歳の記念論文集『神学への入口』(Zugang zur Theologie, 1979) には「基礎神学論文集」という副題がつけられ，第1部「神学的基礎関連における聖書と経験」，第2部「教会と社会におけるキリスト者」とに分けられ，『エキュメニカル教義学』の著者でもある，E. シュリンクの「基礎神学的な問題としての神義論」や，H. フリース，K. ラーナーなどカトリックの神学者を含む12名の論文が収められている。このように，プロテスタント神学においても，弁証学や，神学通論に代わって，基礎神学が次第に市民権を獲得してきている。

II. 基礎神学の歴史的素描：

基礎神学の歴史はいまだかつて記されてはいない，と指摘しているのは，G. エーベリングである[2)]。もっとも新しい『神学的百科辞典』(Theologische Realenzyklopädie＝TRE) で，「基礎神学」の項目を担当しているハラルト・ヴァーグナー (Harald Wagner) も，その冒頭で同様なことをのべている。エーベリング自身が，編集者として責任を負ってきた，戦後版の，もっとも標準的な神学百科辞典(『歴史と現代における宗教』[Die Religion in Geschichte und Gegenwart＝RGG] 3. Aufl.) でも，見出し項目はまだ弁証学であって，基礎神学ではない。その意味で，TRE ははじめて基礎神学を独立した見出し項目とした神学百科辞典であることが注目される。

基礎神学の歴史は存在しない，と述べているハラルト・ヴァーグナーは，そこで基礎神学の学問史をたどる課題に取り組んでいるので，われわれもそこからこの分野の歴史的推移を瞥見してみたい。

(1) 古代教会：基礎神学は，その事柄の本質から言って，すでに「あなたがたの抱いている希望について説明を要求する人には (だれにでも)，いつでも弁明できるように備えていなさい」(Ⅰペトロ 3:15b) と勧められている新約聖書の時代にまでさかのぼるべきものである。“だれにでも”，“いつでも”，キ

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

リスト者がその抱いている希望について語り，答える備えをするという姿勢が，すでに *πρὸς ἀπολογίαν* なのである。この聖書本文は，事実，現代神学において再三言及されているテキストであって，そこにはユダヤ教徒にも，異邦人にも，福音の真理をはっきりと伝えなくてはならない，伝道学的な関心が明瞭に表現されている。その意味で，弁証学，あるいは，基礎神学が，そもそも伝道学的な関心から生じてきたことは見逃すことはできない。この点に着目すれば，四福音書や，とりわけパウロ書簡は，伝道学的・弁証学的な関心に従って表現され，構成された文書であるといえる。

弁証神学者として登場してきたのは，圧倒的な異教文化の中で，福音を伝える課題を担った，ユスティノス，テルトゥリアーヌスなどギリシア・ローマの弁証学者たちであり，その努力は古代末期のアウグスティーヌスの『神の国』(De civitate Dei, 413-426) まで続けられた。かれはそこでは創造論，受肉論，救済論などキリスト教信仰の本質的な諸問題を基礎づける努力をしており，弁証学がただ“外に向かって”なされるものであるだけではなく“内に掘り下げる”営為であったことを明瞭に示している。

(2) 中世教会：中世においては，もはや異教との論争は問題にならなくなっていたが，ユダヤ教との論争は続けられていた[3]。ここで特に努力されたのは，旧約聖書と新約聖書の調和の問題 (concordia Vetus et Novi Testamenti) であった。普遍教会 (eclesia universalis) においては，キリスト教会とユダヤ教のシナゴーグとがともにそれに属するものと考えられていた。しかし，新約聖書にある両者の対立は，十字軍以後，強調され，イエスのメシア性，神の子性をめぐって，数多くの反ユダヤ文書 (Adversus Judaics) がこの時期に現れた。これと並んで，イスラム教が，かつての時代に異教が占めていた位置を占めて論じられるようになってきた。コーランに対する聖書の優位性がこのような状況の中で論じられ，ヴァーグナーはトマス・アクィナスの『反異教徒論』(Summa contra Gentilus) を基礎神学の歴史における重要な標識点と見なしている。

このような《信仰の防衛》の試みと並んで，《信仰の基礎づけ》の試みもな

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

され，そこでは信じられるに値すること（credabilitas）がもっぱら論じられた。中世後期からルネサンスの時期にかけては，この問題はいっそう心理学的な傾向をもつようになり，こころと理解，意思の問題などが近代カトリック神学の方向性に影響を与えるものとなった[4]。

(3) 宗教改革期：中世において，のちの基礎神学にとって大きな課題となった教会論が，その公会主義（Baziliarismus）との関連で論争点となった。それはウィックリフ(J. Wyklif) やフス（J. Hus）をめぐって鮮烈なものとなった。この時代にヨハネス・フォン・ラグーサの『教会論』[5] が現れたのはけっして偶然なことではなかった。それはそもそも教会論としては最初のものであった。その関連で，一つの，聖なる，普遍の（カトリック的な），使徒的という教会の標識（notae eclesiae）が取り上げられて，異端や分離主義者たちはそれを基準として排除された[6]。

宗教改革を通してこの“まことの教会”という問題は，ローマ・カトリックの側では，ローマ教会がキリストの教会としてのあらゆる特性を所有しており，それ以外のものはまことの教会であると認定されることはできない，と主張され，ローマ教会から分離した諸教会やグループなどでは，まことの教会とは何か，それはどこにあるのか，などということについて明確にすることを迫られたのである。宗教改革者ルターは，「われわれが正しい，古い教会にとどまっており，われわれがまさしく正しい，古い教会である，と証明したとしても，それはどのようにして，古い教会に背き，古い教会と対立して新しい教会に向かって方向づけられているのだろう」[7] と問うている。これこそが基礎神学的な問いでなくて何であろうか[8]。

(4) 啓蒙主義時代：ハラルト・ヴァーグナーは，啓蒙主義時代に問題とされた啓示論こそが，近代の基礎神学の本質を形成すると見る。キリスト教信仰の弁明，信仰の基礎づけ，教会の弁証などは，この啓示論という礎石の上に成り立つ議論であるというのである。その点において，カトリックもプロテスタントも同様である。啓蒙主義はヘーゲルの影響のもと，純粋の合理主義と不当に誤解され，とりわけ，カトリック神学の側では，啓蒙主義とは徹底した啓示へ

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

の敵意に満ちたものだとされてきた。そのような確信は，間接的には，啓蒙主義における啓示観，啓示批判にたいする誤った認識によるものであり，直接的には，フランス啓蒙主義における無神論のように，啓蒙主義と合理主義とを単純に同一視したところから生じた。理性が出会うのは，このような自称，啓蒙主義的な見解である。啓示はキリスト教独自の存在領域とされ，キリスト教において啓示として示されるものは，事実，神に由来するものである，と論じられ，組織化されるようになってきた。これが『啓示論』(De Revelatio)，あるいは，『キリスト教の示威』(Demonstartio Christiana) などといった当時の神学的な文書の核心部分であった。これがまたのちの基礎神学の中心部分ともなったのである。プロテスタント側では，これに対応して18世紀以来，アバディック (Jaques Abbadic)，クラーク (S. Clarke)，フック (Luc-Joseph Hooke) などによる，反理神論的・哲学的文書が出された。

(5) 19世紀：近代におけるカトリック基礎神学の父と言われているのは，標準的な弁証神学である『キリスト教の神性と，その現れの科学的な証明としての弁証神学』の著者ヨーハン・セバステイアン・フォン・ドライ (Johann Sebasitian von Drey) である[9]。彼が近代カトリック基礎神学の開拓者として評価されているのは，弁証学的な問題領域と，科学的・理論的な問題領域とを結びつけることに成功した，と評価されているからである。

ドライは，啓示の真理と，理性の真理とが一つであることを論証しようと努め，F. D. E. シュライアマッハーが哲学的神学 (Philosophische Theologie) の下に，弁証学 (Apologetik) と論争学 (Polemik) をおいているが，彼もその可能性をわずかながらも認めている。シュタッドラーの表現を用いれば，その哲学的神学においては，超越でありながら，同時に内在である啓示の逆説が反映されている，神学的な基礎科学が問題となっているのである[10]。

第1ヴァチカン公会議は，啓示信仰と理性との対立に直面したが，「正しく用いられた理性は，信仰の原理を証明し，信仰に照らし出されて，神の事柄に関する科学を形成する」ことを明らかにしている。カトリック基礎神学と銘打った最初の著作は，ヨーハン・ネポムーク・エーアリッヒ (Johann Ne-

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

pomuk Ehrlich）の『基礎学第一部としての，宗教と啓示の神学と理論への普遍的な導入に関する講義の入門書』であった[11]。

このことからもわかるように，カトリック神学においても，基礎神学という呼び方は，19世紀になってはじめて現れたものであったのである。

III. 現代カトリック神学における基礎神学：

カール・ラーナー（Karl Rahner）の基礎神学は，超越論的人間学（tranzendentale Anthropologie）としての基礎神学と呼ばれる。彼の基礎神学的な原理はその著『言葉を聴く者』（Hörer des Wortes, 1940）において示されている。

ハインリヒ・フリース（Heinrich Fries）の基礎神学もまた，超越神学的（tranzendentaltheologische）な基礎神学と呼ばれるが，彼の場合，啓示論を中心とする。従って，その基礎神学は，すべての信仰の内容を包括し，それに先立つ神学的基礎科学と考えられている。

オイゲン・ビーザー（Eugen Bieser）はミュンヘン大学神学部で，カール・ラーナーの後継者としてグアルディーニ講座を引き継ぎ，その著『解釈学的基礎神学の原理』（Grundriss einer hermeneutischen Fundamentaltheologie, 1975）において，解釈学的基礎神学を代表する。マルティン・ブーバー（Martin Buber）やフェルディナント・エーブナー（Ferdinand Ebner）などの，人格主義的な“われ”と“なんじ”の対話と出会いの思考や，ハンス・ゲオルグ・ガダマー（Hans Georg Gadamar）の哲学的解釈学，さらには構造主義などもその背景にあるといわれる。

以上の3名に対して，まったく違った主張をもつのが，政治的神学を提唱するヨハン・バプティスト・メッツ（Johann Baptist Metz）である。メッツの基礎神学は実践的基礎神学（praktische Fundamentaltheologie）と呼ばれる。この際，キリスト者の実践とは，キリストへの信従を意味する。

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

IV．現代プロテスタント神学における基礎神学：

カトリック神学と比較して，プロテスタント神学においては，カトリック的な意味における基礎神学について，知らなかっただけではなく，「カール・バルトの神学の直接・間接的な影響のもとで，それを原則的に拒否した」[12]とされている。バルトはブルンナーとの自然神学論争を通して，神の言葉の神学を，哲学的・普遍科学的に基礎づけることに“いな”（Nein!）を語り，一切の弁証学的な営みを閉ざしたからである。このことは逆に言えば，弁証法神学においてただ一つの例外的な営みは，バルトの論敵となったブルンナーが伝道学的な関心から主張した“結合点”としての形式的な神の像（ein formales imago Dei）の主張であったと言えよう。ブルンナーもまた，従来の弁証学（Apologetik）のもつ消極的な性格を嫌って，新しくより積極的，さらにはツヴィングリ的な攻撃性をもつ言葉として，争論学（Eristik）を主張している。ブルンナーの結合点の主張は，ハラルト・ヴァーグナーの指摘しているように，いつの時代でも基礎神学の基本主題であったのである。弁証法神学において辛うじて基礎神学のともしびを絶やすことがなかったのが，ブルンナーであったといえよう。

20世紀後半になって，われわれははじめて，自らを「プロテスタント基礎神学者」と称する，ゲアハート・エーベリングをもつこととなった。1968年以来，チューリッヒ大学神学部に設けられた基礎神学，解釈学の最初の教授となったのがエーベリングであった。基礎神学の課題は，神学の基礎とはなにか，ということと，その基礎付けがどのようにして遂行されるか，という問いに答えることである。第一の問いに対する答えは，神学の基礎は，信仰の基礎であるイエス・キリストにおいて，イエス・キリストによってなされる基本的な出来事であると，答えられる。活けるイエス・キリスト自身が，最後の決断がなされるための基礎に他ならない。第二の問いに対しては，基礎神学が果たしうることは，信仰をもつ以前の人間，信仰の外側にいる人間に，キリストがいかにして信仰の根拠となるのかを考察することである，と答えることができる。エーベリングは，以前は基礎神学を教義学の初歩的な基礎段階（elementare

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

Grundstufe）であると考えていたが，『神学の学習』（Studium der Theologie, 1975）と名付けられた後の神学通論（theologische Enzyklopädie）においては，明瞭に，基礎神学を神学的な基礎論（theologische Grundlehre）だと主張するようになった。それは，さらに弁証学である。それもまた同時に神学の担っている原理なのである。要綱として，基礎神学は以前に神学通論が行っていたことを継続し，最終的にはそれと神学との関係を思考する限り，科学論（Wissenschaftstheorie）と取り組むのである。

ヴィルフリート・ヨスト（Wilfried Joest）は，その基礎神学において，神学の基礎論と方法論とを提供しようとした。それはもっぱら人間が啓示に向かって存在していることを，哲学的に基礎づけようとするカトリック的な基礎神学とは異なっている。

ヨストは，その原理論と方法論とを，ただ，教義学にだけ限定することなく，神学全体に及ぼすことを考えている。それだけではなく，ヨストの基礎神学は，イスラエルおよびイエス・キリストにおける神の啓示，普遍的啓示，信仰と理性など今日のカトリックの基礎神学が取り扱っている主題をほとんどもれなく取り上げている。このような基礎神学があらわれたことは，その意味ではまことにエキュメニカルな出来事だといえよう。

ヴォルフハルト・パネンベルク（Wolfhart Pannenberg）は，もっとも早い時期にカトリック的な基礎神学と，プロテスタント的な基礎神学との集約点を示した神学者であると思われる。パネンベルクは人間を権威から解放した上で，合理的な次元においてキリスト教が最高の妥当性を有することを論証しようとする。そこで基礎神学が出番となるのである。彼はキリスト教神学が，ただ宗教の神学としてだけ可能であると考える。それはすべてを決定する神の現実の告知を宗教の中に問う。神学の科学としての性格もそこから決定されうるのである。

その他，「理解と信仰：プロテスタント基礎神学原論」[13]を書いたホルスト・バイントカー（Horst Beintker），「釈義と基礎神学」[14]を書いた，著名な新約学者，フェルディナント・ハーン（Ferdinand Hahn），「神学者と最近の科学

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

論の議論」にも参加しているかつての希望の神学者ゲアハート・ザウター(Gerhard Sauter) などが，プロテスタント神学において基礎神学的な営みをしている。

V．プロテスタント基礎神学のために求められる三つの要請：

カトリック基礎神学の二つの基本問題であった，教皇論と教会論のうち，教皇論は，プロテスタント基礎神学では，聖書論とならざるを得ない。いずれもその権威の所在に関する論議となる限り，平行線をたどらざるを得ないが，権威原理ではなくて，解釈原理の問題として取り組む限り，より生産的な展望を得る可能性もあろう。基礎神学において解釈学が重要な位置を占める意味もそこにあろう。後者の教会論は，教会一致の問題として，エキュメニズムの問題として，とりわけ，第2ヴァチカン公会議以後，カトリック，プロテスタント双方にとって共有できる課題となったといえよう。

その大枠の中で，ハラルト・ヴァーグナーは，基礎神学の主要問題として次のような諸問題をあげている。

① 信仰と理性
② 信仰と理解
③ 信仰と実践
④ 信仰と経験
⑤ 真理問題

これとほぼ同趣旨のことを，ホルスト・バイントカーは論文「理解と信仰：プロテスタント基礎神学原論」において展開している。そこで彼は次のような主題をあげてそれぞれ命題をたてている。

① 神学的原理論の新たな命名と，その具体的な課題設定（1〜12）
② 人間実存の原現象としての理解と信仰に関する神学的見解（13〜18）
③ 福音主義的な使信の核心としての神と人間に関する，救済史的に基礎づけられた見解（19〜22）
④ 神学的作業の主要観点（23〜28）

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

⑤　知識と信仰（29〜34）

⑥　科学と神の問題（35〜42）

⑦　信仰と現実把握（43〜51）

⑧　信仰の本質と真理，果実と確証（52〜63）

⑨　信仰のこの世性（64〜75）

⑩　信仰と（救済の）歴史（76〜87）

⑪　信仰と真理問題（88〜99）

⑫　信仰と理性—理性と啓示（100〜113）

⑬　啓示と神学—ケーリュグマとドグマ（114〜125）

代表的なプロテスタント基礎神学者，G．エーベリングは，1970年6月2日と4日に，カトリック神学者カール・ラーナーも教鞭をとっていた，インスブルクのレオポルト・フランツェンス大学の創立300年記念に，そこの「教義学と基礎神学のための研究所」の招待によって客員講演をしている。これがすでにあげた論文「福音主義（プロテスタント）的な基礎神学論」である。この講演の最後の部分で，エーベリングは，福音主義（プロテスタント）的な基礎神学のために彼が特に重要であると判断している次のような三つの要請事項をあげている。

(1)　神学の本質的内容（Sache）に向かって，神学の作業を統合（Integration）すること。

今日，神学はかつてないほどに専門的に分化し，多岐多様化している。その結果，神学そのものが結局は喪失の危機に立たされることになってきている。神学者たちが，その内側にあって専門家として学問的に通暁することができる地平は，ますます狭くなってきており，自分の専門領域以外の問題については，ともに語ったり，判断を下したりできるかどうかは，はなはだあやしくなってきている。数多くの研究が，過剰に供給されるために生かされておらず，その限りではまことに不毛と言うべき現状である。専門の神学研究者としての生涯を送ることを目ざす者が後を絶たない反面，教会という実践の場で働く者

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

が不足している。このような不毛な分化現象，専門化現象にたいして，統合化が緊急な要請として提起され，チューリッヒ大学神学部では1971年の夏学期には，試験的にそのような統合講座が始められている。エーベリングがこれを神学の本質的内容（ザッヘ）に向かっての統合化といっていることは重要である。彼はそのザッヘが何であるかは特定してはいないが，基礎神学の基礎はイエス・キリストであれば，それは静止しているキリストではなくて，われわれに先立って歩む動的なキリストとして，われわれをその伝道（missio Christi）へと動機づけるものだと言えよう。もしも，エーベリングがここで問題にしている神学が教会を死滅させるものであれば，基礎神学はそれを活性化させる道として求められていると言えようか。

(2) 信仰に基づいて，キリスト教的なものを集中（Konzentration）すること。

第1の要請の統合化と共に，第2の要請では集中化が求められている。そのような要請は，伝統によって継承する圧倒的に豊かな遺産と，それを生かすことが僅かしかできない，というアンバランスに直面するところから来る。キリスト教信仰は，信仰の根拠としてのイエス・キリストへの信仰であるが，それは点のようなものではなくて，聖書のコンテクストや教会史の過去とも結びついている。もちろん，それはただ過去の思い出に生きるということではないが，たえず彼をこころに刻むことによって（Er-innerung），死せる過去ではなくて，活ける過去として，生命の泉となるのである。このようにして信仰の根拠それ自体を経験し，そこからさらに活き活きとした信仰が生まれるのである。

(3) 信仰をありのままの生活の中に限定する（Lokalisation）。

信仰は，実際になされている生活のただ中以外のところで，一体，どこにその場所をもち，その必然性や，生活をもつべきだと言うのだろうか。エーベリングはその論文集『言と信仰』の第4巻を「生の対局における神学」と題して

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

いることはすでに触れたところであるが，それはある意味では，対局の中の生から，どれがほんとうの生であるのか，そのありのままの自然の生への探究だとも理解できよう。彼はその最後の対局として《生と教え》をあげて，その中で「ルターの死との対決の神学」をめぐる議論を展開している。信仰をありのままの生活の中に限定することを求めることは，ありのままに死と対決する神学を探究する神学でもある。このような基礎神学の射程には，神学的死生学も当然入ってくるものと思われる。

VI. 基礎神学の展望：

プロテスタント基礎神学は，従来の弁証学，神学通論をより洗練された仕方において包括するものであって，聖書論（聖書解釈学）と教会論（エキュメニズム論）を柱とする。

それは神学のザッヘとして活ける神のわざである伝道（missio Dei）への参加を志向するダイナミックな営みであって，聖書テキストと，歴史的世界のコンテキストとの統合を追求し，その射程は，世俗化論，レジャー論，人間論，フェミニズム，世代論，家族論，教育論，福祉論，ディアコニア論，障害者神学，神学的死生学，ホスピス論，メンタル・ケア論，生命倫理，マスメディア神学，地球環境論，国家と宗教，宗教協力の問題，アジア論，その他の諸問題に及ぶ。

注

本論文は，1997年1月8日に八王子の大学セミナーハウスでなされた東京神学大学教職セミナーでの主題講演を基としたものである。わたしは同年3月末に定年退職したが，わたしとおない年で遅生まれの赤木善光教授もわたしと同じように健康を気づかいながら定年退職を迎えられたことを感謝をもって覚えつつ，この小論を同教授に献呈したいと思う。赤木教授の専門とされるアウグスティーヌスはまことにスケールの大きな神学者であったが，各分野にわたるその業績は彼が基礎神学者であったことことを示しており，赤木教授が教会史の専門家でありつつ，聖餐論を中心とする教会の理解や，日本人とキリスト教の問題について示されている深い洞

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

察もまた基礎神学的な貢献であると言えよう。

1) E.ブルンナーは伝統的なApologetikを消極的な概念として，Eristikなる造語をそれに代わって用いることを提案している（熊澤義宣・芳賀力訳，『教義学』第1巻，特注参照。1997年，教文館）。
2) 「福音主義（プロテスタント）的な基礎神学論」Wort und Glaube, IV. S.395
3) W. Schiferth, Kirche und Synagoge im Mittelalter. 1964
4) K. Eschweiler, Die zwei Wege der neueren Theologie Gerg Hermes-Matt Jos. Scheebens. 1926
5) Johannes von Ragusa, Tractus de Ecclesia. 1431
6) その弁証学的な適応については，G. Thils, Les notes de l'Église dans l'apologétique catholique depuis la Réforme. II. 37参照。
7) WA 51, 473f.
8) この問題全体については，W. Höhne, Luthers Anschauungen über die Kontinuität der Kirche. 1963参照。
9) Die Apologetik als wissenschaftliche Nachweisung der Göttlichkeit des Christentums mit seiner Erscheinung. 1838-1847. 1967
10) R. Stadler, Grundlinien der Theol. Schleiermachers. I. 1969, I. S.23
11) Leitfaden für Vorlesung über die allgemeine Einleitung in die theologische Wissenschaft und die Theorie der Religion und Offenbarung als erster Teil der Fundamental Theologie. 1859
12) Gerhard Ebeling, a.a.O. S.377
13) Kerygma und Dogma. 1976, S.22-40
14) ThQ. 1975, 262-280

NII-Electronic Library Service